

17世紀のイギリス経済思想

——植民思想を中心にして——

佐 原 昌 弘

I

17世紀のアメリカ植民地における経済思想を十分に理解するためには、やはり当時のイギリスの数多い植民思想を詳細に検討しなければならない。なぜならこの植民思想が、植民地において大きな成果をあげて以来、植民化へのプロパガンダはその思想に深い影響を与えたからである。とりわけアメリカ大陸への植民が成し遂げられた目的と動機は、イギリス本國やその植民地でよく理解されていた。例えば、マサチューセッツ湾の場合においても、その植民地化奨励者が実際に開拓者となってその植民の動機づけの思想をすべての開拓者の心に注入したという事実からも推測できる。このように当時においては植民思想の流行は避けられないものであった。

植民地化についての活発な、また体系的な議論は16世紀後半期——エリザベス一世の時期で海運発展の全盛時——に展開された。そしてそれは1643年の市民革命という重大局面によって覆い隠されるまで人々の関心を引き続けた。もっとも市民革命に先立つ10年間には植民化に対するプロパガンダの量と効力が序々にではあるが減退を示していた。従って最も重要な植民化へのアジェンションは、約50年間にわたって激しい愛国的感情や商業的競争の助長によって、または外国貿易の増進によって注目されていたといえるであろう。またこの期間のアジェンションは、イギリスの発展のために有益な産物を供給するという植民思想へと導いたのである。

そこで植民化へのアジェンダとプロパガンダは、アメリカ移民と密接に関連づけられるものであるから、その主な要因と目的或はその理想を見つけるために詳細な研究がなされねばならない。その意味において私が検討しようとする思想の多くは、最初にアメリカに渡った著述家達によって再現されたものである。

植民に関して著作を残したイギリスの著述家達の殆どはプロパガンディストであった。彼らは共に植民に対して関心を持っていたけれども、その目的は異なるものであった。例えば——冒険を愛する者は他の理由によるが——その多くは富や名誉を獲得するためであり、また他の多くは巨大なイギリスの敵を打ち倒さんがためであった。実際に、だれもがただひとつの動機によって影響されることはなく、むしろ種々雑多な動機の混同が各々の場合にみられたのである。

これらの人々が、この植民地化問題について執筆し、公にしたため、彼らの種々の見解はさまざまな風潮を呼んだ。彼らは伝導者⁽¹⁾、奨励者⁽²⁾、哲学者⁽³⁾などの区別なく植民地に関してや植民の意義、有益性、方法等の思想を表現したのである。これらの諸見解は広く流布され、植民化政策に関係したすべての人々に影響を与えた。ただそれらの諸見解からは、非常に多数の疑問点が発見されるのである。その疑問点に対して、エリザベス朝時代のイギリス人達は、熱心な関心を寄せたのであるが、本稿においては彼らの経済思想を検討していくなかでその関心がどのような視点からなされていたかを中心として考察していきたい。

(1) R. ハックリュートやJ. ホワイトのような人達。

(2) W. ローリーやH. ギルバートやR. ジョンソンのような人達。

(3) T. ホップスやF. ベーコンのような人達。

II

植民地への激しい欲求は、外国貿易がある一国を富ませるために重要な意味があったという原理の当然の所産であった。ジョンソンは「自給自足はイギリスにおいて貧しさしかもたらさない⁽¹⁾」と云い、その証明のために彼は「エリ

ザベスの黄金時代⁽²⁾」以前のイギリスを引用した。

外国貿易と結びつけられた産業は、国家的富を獲得するための真の手段であったと主張され、小さな島でしかないホーランドが、イギリスの所有する大きな天然資源にもかかわらず食糧や海運においてイギリスを凌いでいたことから⁽³⁾、貿易は王国を維持するための主な手段であり⁽⁴⁾、貿易発展の方法を航海にあると信じられた。いかに外国貿易の報酬が大きなものであったかを「最近、多くの私達の隣邦——ネザーランド等——の体験が教えてくれた。⁽⁵⁾」それによって、その報酬がある一国の欲求を供給するだけでなく、他の国の人々にも望まれる商品をも得られることができたのである。また外国貿易の発展と同時に、個々の植民地開拓者において利益や名誉が得られるのと同じように国家においても制海権や国力の巨大さが現われるようになった。

しかし国際貿易の奨励と発展においては、植民地の働きが最も重要なものであった。永久的貿易関係は、ただ単に「疑わしい友人達⁽⁶⁾」から譲歩することによって確立されたのでもなく、また国家的誇りや自尊心の強い国家の理想とをなんの不満もなく整理したものでもない。純粋な経済的背景においてもまた植民地が商業的発展の好ましい手段として考えられた。例えば、外国の関税が無効にされ、それによって輸入の価格は引き下げられたりするからである。そしてもうひとつの見解は、植民地が正常な共和国の再成過程であるというものである。

F. ペーコンは「植民は古代の、原始的な、英雄的な事業のひとつである。世界が若かった時には、多くの子を産んだ。が今は世界が老いてあまり子を産まぬ。新しい植民地は古い王国の子供と見做されて差支なかるうから⁽⁷⁾」と云った。また共和国の出産を主題として植民地を議論したホブスの見解であるが、彼は「彼ら自身の共和国⁽⁸⁾」かさもなければ、出生にそれを与えた「母国⁽⁹⁾」として絶対必要な部分であると主張した。

植民地を確立するための方法としての提議は多数で雑多なものであった。しかし二・三の一般的な原理は、普通知られている種々の事業から推察することができる。ペーコンが「私は処女地に於ける植民を好む。即ち他の民を植ゑつ

けるために、その土地の民が排除されない植民である。さうでなかったら、植民といふよりは、根絶といふ方が当ってゐるから⁽¹⁰⁾。」と云うように未だ確立されていない国における植民は、疑いもなく望ましいものであったが、豊富な天然資源の地域における植民活動では「あふれるほどの豊富さが、労働、節制、正義、愛情、度量にとって害になり、自尊心、気まぐれ、論争を助長する⁽¹¹⁾」ことになるからと云って、ニューイングランドのような地域での植民活動を奨励していた著述家達は疑問視した。しかし一般的には豊富な天然資源の開発は植民活動への重要な論点であったことからして、多くの著述家達はそのような可能性を挙げて反論したのである。主要産物の増進や鉱産物の発見は、それ故に強調された。しかしペーコンは「鉱産物の見込みは甚だ不確実なものであり、植民者等を他の仕事に於いて懈りがちにすものであるから⁽¹²⁾。」というわけで鉱山物については半信半疑であった。注意深い著述家達は、植民が性急に利益を産しない⁽¹³⁾ということやこのための失敗は、早まって利益が得られなくなるだろうし、その事業の成功は危険にさらされるだろうということを知っていたのである。また人々が植民者として植民活動に参加するためには彼らを誘うことのできる魅惑的な誘因が必要であるということも明確に理解していた⁽¹⁴⁾。したがって彼らは新しい国の設立が魅惑的な事業であらねばならないと考えていた。植民活動を人々が嫌うようでは、労働を節制して使用する必要をヨリ多く開拓者に課さなければならないからである。それ故に成功した植民とは、最小の労働をもって最大の利益を獲得できたところであった。

(1), (2) *Peter Force Hist. Tracts*, Washington, Vol. I., pp.17-18.

(3) Cf. *ibid.*, p.18.

(4) Cf. A. Brown, *The Genesis of the United States*, New York, 1964, pp.36-42.

(5) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. I., p.17.

(6) R. Hakluyt, *Voyages*, Everyman's Library, Vol. V., p.168.

(7) F. Bacon, *Essays*, Everyman's University Library, p.104. (神吉三郎訳, 岩波文庫, 160頁。)

- (8), (9) T. Hobbes, *Leviathan*, New York, 1886. p.118.
(水田洋訳, 岩波文庫, 154頁。)
(10) F. Bacon, *op. cit.*, p.104. 神吉訳, 160頁。
(11) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., p.18.
(12) F. Bacon, *op. cit.*, p.105. 神吉訳, 162頁。
(13) Cf. *ibid.*, p.104. 神吉訳, 160頁参照。
(14) Cf. *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., p.4.

III

前章で述べたような植民の方法上のことよりもっと重要なことは、その是認と弁明の問題であった。例えば植民が自然法に矛盾しないか、またはクリスチャンの行為として恥ずかしいものではないか等である。「自然的な商業と国民の間⁽¹⁾」は神や人間の法によって是認されると考えられた⁽²⁾。そして植民地がそれを奨励するために計画されたことにおいてヨリ一層自然的商業は国民の法によって是認されると考えられた⁽³⁾。思想家達は「植民地は神の指示と命令からそれらの正当な理由をもった⁽⁴⁾」として地球上のすべての文化的空白地が植民によって開拓されてしまうまでキリスト教徒は聖書の指示によって義務を負わされると考えたのである。まさに人類への地上の送り物はそれに移民する義務を課したことである。というのは神は無駄には何もしないのであり、「人間が住むことによってのみ地上の利益をなし、人間が住むことなくしては文化など想像することはできない⁽⁵⁾。」からである。そのうえ、人間の性質は、その欲求が飽くことを知らないために新しい国々への情熱を正当なものとして理由づけた、また「あらゆる人々の生活はヨリ快適なものとなり、またヨリ大きな土地においてヨリ豊富な供給が得られるということは人間の性質から考えて否定することができない⁽⁶⁾。」自国の静隠は、同様に、ローマの植民地の歴史が示したように移民と植民によって約束されるであろう⁽⁷⁾。木々は小さな養樹場においてより、大きな果樹園においての方がヨリ良く繁殖するように、ヨリ大きな領土の結果としてヨリ大きな幸福の可能性があるという自然の一般的原理を示したものである。そこで、市民社会においてはわずかな数の人達が「高くそ

びえ、最後に弱者が飢えるのである⁽⁸⁾」が、植民地はすべての人達のために等しい機会を用意していたのである。このような思想的背景から、国を発見し植民しないでそれらの国を放置してきたりすることは、倫理的に不条理であり、不経済であるとして非難された⁽⁹⁾。すなわちキリスト教信仰精神があまねく地上に広げられ、現世の改善をおろそかにしなかったからである。またこの信仰精神は「暗黒の世界に長くおかれた貧しい人々⁽¹⁰⁾」の間に植民することを目的としないで説教されることはなかった。したがって福音書の効果ある扇動は植民地化を要求することであった⁽¹¹⁾。

(1), (2) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., p.5.

(3) Sir George Peckham, *Hakluyt's Voyages*, Vol. I., p.49.

(4), (5) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., pp.1-2.

(6), (7) G. Malynes, *Consuetudo, vel, lex mercatoria*, London, p.164.

(8) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., p.3.

(9) G. Malynes, *op. cit.*, p.166.

(10) R. Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, pp.8-9.

(11) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., p.36.

IV

重商主義者によってもてはやされた経済的自足の欲求についての見解は植民地化に関するイギリスの文献によくみられるものである。というのは重商主義には強国の創造という本来の目的を持っていたからであり⁽¹⁾、また重商主義は国家や植民地が大いに競争関係の国々から独立して自給自足の国家になったとき、最もよく成し遂げられると信じられたからである。この重商主義政策を成し遂げるにおいて、地上の様々な土壌、気候、資源をあまねく国家単位に小区分することがその方法となったのであるから、植民は絶対に欠かすことのできないものであった。

ハックリュートは「物資の供給」について次のように述べている。「我々はフランス、フランダース、ドイツ等から現在受けている大量の精製品を植民地から受ける。そのため我々はこの王国の多くの敵のプライドを威圧するのであ

17世紀のイギリス経済思想

る⁽²⁾。」それ故に外国への従属は、植民地によって未然に防がれ⁽³⁾、また実質上の経済はこのような経済的独立から生まれるのである。さらに外国の君主達によってかけられている大きな関税やその他の重い税等⁽⁴⁾は避けられるであろうから輸入価格は引き下げられる⁽⁵⁾。そのうえもし損害が出たとしても「第三の市場⁽⁶⁾」によってそれは最小限のものとなるであろう。このように母国と植民地との間の貿易は「外国貿易よりも国内商業⁽⁷⁾」に等しいものであった。

最後に、植民地は従来外国から輸入していた品物を新に母国に供給することによって重商主義者のプログラムのなかで重金主義者の意図を満足させたのである。

植民活動が起ったときから、母国と植民地との関係は重要な問題であった。この点に関してホブズは植民地を大きく二つに分類して考えた。まず第一には、新しく確立された植民地は自力によって新しい国家になった。すなわち名誉と友情の絆によってのみその母国に縛られたのである⁽⁸⁾。第二には母国に結合して残った国家、すなわち解放された共同社会というよりはむしろ「州」であった。そして本当に支配関係にあったのは後者の場合であった。その母国と植民地の基本的な結合は長い間維持されたのである。ホワイトは次のように云った「国家は等しく公平な眼でその母と娘を見なければならぬ。すなわち植民地は彼女自身の身体の一部であるということを想起することである⁽⁹⁾。」子供の幸福ということにおいて親は特別な関心を持つべきであるが、同じような背景において植民地はそれに誕生を与えた母国に有利になるべきであろう。なぜなら「情愛が注がれるべきである国に対して尊敬するという義務を否定している植民地は大きな怪物のようなものであり、不自然な子供のようなものである⁽¹⁰⁾」から。

植民活動の特有な目的は、本質上重商主義に内包する哲学から育ったのである。前にも述べたように植民地は食料や原料の供給地として仕えたので除々にはあるが母国での外国への依存度は減少した。またそれは外国市場よりもヨリ不変で、ヨリ確実に輸出できる市場を母国に提供した。しかも船舶をも発達せしめて、その結果軍事的にも母国を強国ならしめたのである。このように植

民地からの利益は多々あるが、重商主義者のたゞ大望のみの言葉で植民地に期待する利益を説明することは甚だ不十分である。例えば植民地が厄介な人口問題をさばいてくれるというイギリスの期待は、一部分重商主義の局面であり、一部分はそれから独立した問題であった。

基本的には重商主義者の原理に一致して、植民に関して著述したほとんどの筆者達は、植民地は必需品の供給源として仕るべきだと主張した。また特別に植民地が供給するものはしばしば何人かのヨリ楽観主義者の想像の範囲内に限られたのである。しかしそのような楽観主義者の想像の範囲というものはある必需品を母国に供給するという固有の欲望の証明それ自身であった。一般に供給が望まれる品は四つのグループにわけられる。まず第一に、金、銀そして貴重な鉱物で⁽¹¹⁾、その富の種類は重商主義者の重金主義学派によって最も高貴に考えられた。第二に母国において生産されていない必需品、すなわちその供給が外国人達からもたらされねばならないもの。第三に船舶用品。第四に全く不変の国際的要求のあった品物やそれ故に貿易において希望の品が供給されるであろう品物。このような必需品は金の流入を容易にし、それによって第一のグループと同じ結果をなすのである。

イギリスは鉱山を所有していないので経済政策の目的としての金、銀等の貴金属の影響が、植民化政策の文献に普及することは自然であり、論理的であった。しかしその貴金属の獲得についての議論は、その直接的な方法よりも貿易差額を通じての蓄積法がヨリ優位な位置にあった。ハックリユートは植民地が果物、ブドー酒、皮、亜麻、船舶用品を供給するなら、金、銀等の貴金属は蓄えられるだろうと指摘した⁽¹²⁾。ジョンソンは「世界のあらゆる部分からほとんど得られないそのような必需品を供給する」ために植民地化を主張した⁽¹³⁾。ウィリアムズは植民地からそれ以来来るであろうそのような品物にいつも支払っていた輸出は、金であったと述べた⁽¹⁴⁾。特に重要なことは植民地が作った品物は「未加工品⁽¹⁵⁾」であり、その製造業は母国の人々を雇用し、その製造品を外国に売った時、ヨリ多くの金、銀を母国に持って来るだろうという思想もまた存在したことである。

17世紀のイギリス経済思想

国際間の要求が活発であった品物の供給は、筆者達にとって、母国自身で要求されている品物とほとんど同じぐらい重要なものであった。それは魚や塩や木材のようなものである⁽¹⁶⁾。またこれらの品物は物か金のどちらかをもたらし、「しかもすべての衰えた貿易に対する望みを満たすであらう⁽¹⁷⁾。」イギリスは、漁場に近接した植民地をもち、この重要商品で自国の欲求を満足させ⁽¹⁸⁾、さらにヨーロッパに供給することにおいてオランダに取って代るということが約束されたのである⁽¹⁹⁾。貿易上の特有な重要商品の供給を植民地に課したことは、イギリスが商業上のライバルを打ち負し、彼らを貿易から縮出し⁽²⁰⁾、彼らの金、銀を使いつくさせることによって彼らを弱体化させるのである。

プロパガンディストの著作において、船舶用品や船は、個々の論点の利点に値するために非常に重要なものとされた。外国貿易が一国を富ませる手段となつて以来、艦隊の発達や船員の訓練は貿易発展の手段となった。というのは海運上の主権は力と国家的名誉を意味するからである⁽²¹⁾。植民地の発達は、三点の異なる方法において、船舶を活気づけ、船舶や人間の数を増加させた。第一には、遠隔の植民地は運搬業を引き起こしたこと⁽²²⁾。それは海外の植民地が「大きな船」を要求するだろうから、また商人達はその国に計り知れない価値を持った物を供給したがるであろうから⁽²³⁾。植民地が海運力を準備するために助力できうる第二番目の方法は、船舶の事実上の建造であった。ギルバートは北方植民地について次のように書いた。「こゝでもまたわれわれは國家の負担なくして、船舶と船員の両方を増やすだろう⁽²⁴⁾。」しかしもっとはるかに重要なことは、植民地が船の建造に必要な物資を供給することができるだろう——特にイギリスは外国資源の供給に頼っていたため——という思想であった。そのような船舶用品の供給が母国の人達に大きな船舶の建造への意欲を増進させなのである⁽²⁵⁾。ただイギリスの天然資源からは供給することのできないマスト、タール、ロジン、ピッチ等は外国の力のみ託していた⁽²⁶⁾。しかしもしその船舶用品の供給が大規模なものであったなら、母国の需要を満足させるだけではなく、母国はまた他の国々に販売するために船舶を建造したのであらう⁽²⁷⁾。このようにこれらの方法によって外国植民地は母国の海運力を増加さ

せたのである。この点に関して主な研究は、船舶活動が有能な水夫や立派な指揮官の人数に支えられていたことから、熟練した水夫の軍団の出現を予期した⁽²⁸⁾。また航海船舶の増加は否応なしに水夫ばかりでなく造船工や建設工⁽²⁹⁾も数と熟練の両方⁽³⁰⁾で増加させたであろう。というのは船舶の豊富さや「熟練した司令官、屈強なパイロット⁽³¹⁾」の豊富さが、敵に負けずに、また経済的に自給できる国家が繁栄することのできる範囲内で「この国家の固い壁⁽³²⁾」を準備するために考えられたからである。

植民地が供給源として仕えるべきであるという論理に母国の生産物のための市場としての植民思想をも付け加えられた⁽³³⁾。この概念もまた貿易性を力説し、そして輸入のためか或は金のためか輸出貿易の政策を強調したのである。例えばハックリュートは植民地によってイギリスは「それらの地方の多くの安い品物を交換した……そしてこれが王国を非常に豊富に⁽³⁴⁾」することができたであろうと述べた。しかしこの点における一般的論理はもっと先へ進んでいた。まず第一に植民地の市場は国際的紛糾においても動じないコントロールされた市場になるであろう⁽³⁵⁾というものであり、それは妥当な輸出への要求を増加させ⁽³⁶⁾、それによってイギリスの職人達に利益を獲得させるであろう。なぜならそのような商品はあらゆる階層の労働者によって十分に精製されてこの王国から出て行くだろうから⁽³⁷⁾。そのうち、最も大きな強さを発揮するのは「衣類の古代商業⁽³⁸⁾」を復興する意味で「イギリス衣類の強力なはけ口⁽³⁹⁾」の増進にあった。そしてそれは労働を保証し、そこにすべての職人の繁栄が約束されたのである⁽⁴⁰⁾。

植民地に関する議論において植民地が母国の雇用を増加させるであろうという事は、かなり重要なことであった。それはイギリスの経済状態に直接影響したためであった。しかし自国の雇用が増加されたということは、あくまでも植民地化における利益の一部分であった。それは植民地として開拓された地方の原住民——新しい国に輸送された人々と共に——が輸出されたかなりの量を消費するだろうと想像され⁽⁴¹⁾、その結果、労働者の間に社会的不安や貧乏、怠惰、圧制⁽⁴²⁾のある母国に雇用を豊富にするであろうと考えられた⁽⁴³⁾。

17世紀のイギリス経済思想

ヨリ多くの貿易，ヨリ多くの産業，ヨリ多くの船舶によって国家はヨリ多くの収益を期待し，獲得することができたであろう。「商品と名のつくものは何でもそれらからもたらされるだろうし，また本国から植民地へ輸送されるだろう。しかもそれは需要者の選択が許されないのであるから，非常な勢で王国の収入を増大させ，あらゆる種類の人々を豊かにする⁽⁴⁴⁾」とハックリュートは書いた。ベーコンが関税からの自由はその形成期に新しい植民地で請け合われるべきである⁽⁴⁵⁾と助言したのであるが，しかるに植民地化に関する一般的な理論は輸出・輸入税の両方から収入を増加するための方法⁽⁴⁶⁾を考えたのである。収入を増加するために進めた他の方法は，ニューファンドランドの漁場における外国船へのトン税の徴税であった⁽⁴⁷⁾。

- (1) シュモラー「重商主義とその歴史的意義」正木一夫訳，未来社，57-58頁参照。
- (2) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.158.
- (3), (4) Brown, *op. cit.*, p.340.
- (5) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.157.
- (6) Peter Force *Hist. Tracts*, Vol. III., p.18.
- (7) Brown, *op. cit.*, p.39.
- (8) Hobbes, *op. cit.*, pp.169-170.
- (9) Peter Force *Hist. Tracts*, Vol. II., p.19.
- (10) *Ibid.*, p.14.
- (11) Cf. Malynes, *The Center of the Circle of Commerce*, New York, 1973, pp. 1-7.
- (12) Hakluyt, *Voyages*, Vol. V., p.165.
- (13) Peter Force *Hist. Tracts*, Vol. I., pp.16-17.
- (14) Peter Force *Hist. Tracts*, Vol. II., p.18.
- (15) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, pp.42-43.
- (16) *Ibid.*, p.106.
- (17) *Ibid.*, p.19.
- (18) Hakluyt, *Voyages*, Vol. M., p.68.
- (19) Peter Force *Hist. Tracts*, Vol. II., p.5.
- (20) Cf. Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.158.
- (21) Cf. Hakluyt, *Voyages*, Vol. M., p.60.
- (22), (23) Cf. Hakluyt, *Discourse Western ,Planting*, p.90.

- (24) Hakluyt, *Voyages*, Vol. V., p.92.
- (25) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.91.
- (26), (28) Brown, *op. cit.*, p.37.
- (27) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. I., pp.16-17.
- (29) Cf. Hakluyt, *Voyages*, Vol. M., p.60.
- (30), (31) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, pp.89-91.
- (32) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., p.5.
- (33) ベアはその著 “*The Origins of the British Colonial System*” のなかで新しい資源の供給への期待が植民地化の基本的な動機であったとしている。
- (34) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.157.
- (35) Hakluyt, *Voyages*, Vol. V., p.116.
- (36) Hakluyt, *Voyages*, Vol. M., p.80.
- (37) ヘイルズ著「近世ヒューマニズムの経済思想」, 出口勇藏監修訳, 有斐閣, 138頁。
- (38), (39) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. I., p.22.
- (40) Hakluyt, *Voyages*, Vol. M., p.61.
- (41) Hakluyt, *Voyages*, Vol. V., p.116.
- (42) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.39.
- (43) *Ibid.*, p.160.
- (44) Hakluyt, *Voyages*, Vol. V., p.165.
- (45) Bacon, *Essays*, p.106. 神吉訳, 163頁。
- (46) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.86.
- (47) *Ibid.*, p.88.

V

次に人口問題の植民理論への影響を考察してみよう。イギリス植民政策の著名な学者である G. ベアは、最初人口問題の視点より植民活動の分析を試みた⁽¹⁾。彼によると母国が植民地にとる政策は移民に対する母国の態度に依るといのである。もし母国が人口過剰であると信じられるなら、植民地はその過剰の流出によって直接の利益を供給することができる。しかしもしその国が過剰人口でないなら、むしろ人口密度の増加を望んでいたなら、植民地はその国のウィークポイントとなり、他の利益の形をとって沢山の賠償を供給せねばならない⁽²⁾。この分析を基礎にして、ベアはイギリスの人口論を論じた。また彼

はこの分析の時代区分をもひとつの試論として提出したのである。彼の結論は、前者——人口過剰——が王制復古の時代に存在し、後者がそれ以後の時代に存在したとしたのである⁽³⁾。

しかしたとえ植民地時代の文献が母国の人口のいくらかを取り除くのに植民地は有効であるという示唆を十分に与えたとしても、沢山の論証が、密集した人口に対する一般の重商主義者達の偏愛を示しているのである。1660年以前の時代の植民活動への関心は、過剰人口という理由で説明されることはできない⁽⁴⁾。イギリスの人口密度を増加するための重商主義者の理論は、王政復古以前にはあまり現われなかった。その主な理由には、少くとも次のような三点があると思われる。第一には、母国の直接的効用を強制することは、植民地の開拓者のための政策であったということが思い出されねばならない。したがって低い税、貧民階級の減少、刑の低い適用量への訴えが強調されたのは当然であった。二番目には、重商主義理論の体系的発展は人口に非常な重きをおいて導かれたことである。その意味においてチャールズ二世下の経済哲学はエリザベス時代のそれと比較して進歩し、成熟していた。三番目には、移住させる人口を供給することが、初期の時代において、最も難しい問題のひとつであったということ。資本と冒険家達は容易に得られたが⁽⁵⁾、頼りになる開拓者の供給は限度があった。すでに当時の文献には、移住者の新しい国で遭遇するいろいろな困難についても述べられている⁽⁶⁾。そこで国家に関心を引かせるために上記のいくつかの個人的な計画には方便と必要の両方から過剰人口論を強調したのである。

先の三点の理由は、植民地に関する文献のなかで沢山あるイギリスの過剰人口問題への論及に光を投げかけた。しかしこの論及から植民の動機を分析しようとするのは誤りであり、不正確である。というのは植民化主張者の著作に見られる人口論への論及もまた他の著作と同じように、詳細な検討がなされねばならないからである。これらの論及はすべての問題における根本原理というよりはむしろすべての植民思想のなかでの一部と考えられる。その時代の著述家が重商主義者であったかぎり、彼らは大人口が望ましいという思想を受け入

れるのであり、他方その時代の著述家が植民化主唱者であるかぎり、彼らは外交面においてそれらの重商主義を抑制したのである。

母国からの人口流出の手段としての植民地に対する主張は、母国の失業の減少、犯罪の減少、貧民救済の費用節限そして減税への期待に集中していた。またこの時期の著述家達は経済的不調節の徴候をも認めていた。過剰人口に対するひとつの規準は、国が扶養したり、雇用したりすることのできる人数よりも多くの人口を持った場合であると考えられた⁽⁷⁾。そこで不必要な多くの人口が充満している国家の改善方法は、神学者達によって認められ、ローマの先例によって正当づけられたのである⁽⁸⁾。またマリーンズは「戦争、飢饉や疫病がその国家を一掃することがなかったならば⁽⁹⁾」人口の自然的増加への傾向にあるだろうと予見した。それと同じような見解は、「人口の無限の増加がすべての生計を危険にさらすといけないので我々の人口の大多数の増加を移住によって⁽¹⁰⁾」解決せんとしたバージニア会社⁽¹¹⁾の人々によって表現されたのである。国民の力と数において国王の榮譽が滲透していたことを認めた著述家達は、同じ時期に、人口が正当な、またはよくつり合った人数で増加していた⁽¹²⁾と主張した。そして彼らは移民についてもそれは調整的なものであらねばならないと信じていた。

しかしヨリ長い間主張された理論は、植民地が経済的要因を離れることによって犯罪を少なくするというものであった。ベアはイギリスの経済状態が貧困状態に直面していたと強調したのであるが、この意味において彼の強調はまったく正しいものであったと云える⁽¹³⁾。それを論証するものとして、当時の文献は犯罪を例にあげている。怠惰な人達は雇用の機会を失い、「みだらで行儀の悪い行為をする人達の群と云われた。そのため我々が彼らの外国での雇用を捜す方法がないのなら、我々はすぐにより多くの刑務所と罰則を用意せねばならない⁽¹⁴⁾。」すべての植民地では窃盗や追はぎ⁽¹⁵⁾と同じように暴動、扇動、騒動や反乱、食糧難や貧乏を、治療したのである。さらに犯罪と同じように病気や疫病が「何百万の人口に伝染し、それは毎年我々の間で増加していった⁽¹⁶⁾。」それ故に、これらの災難は「その苦悩の養生のための高い税金⁽¹⁷⁾」か、或は

「彼らの悪への腐敗や肉体的欠陥⁽¹⁸⁾」かによってだれもが感じる事ができた。そのため植民地は貧民に関心を示し、これに対する重い徴税が課せられるに至った。しかしそれは「あなたの陸軍や海軍を維持し、補充し、奨励するのに使用される収入⁽¹⁹⁾」と主張されたのである。輸送された貧民区の孤児や貧乏人は、植民地においてはいい意味で重要な対象物となった。出生区においての彼らは、乞食または精々日雇労働者であったが、植民地は彼らに経済的機会を与えたからである。それは「彼らの長所や能力を引き出すための広大で華やかな劇場や彼らの正直で、勤勉で、強い公共意識という果物の種を蒔き、刈り取る大きな畑⁽²⁰⁾」を与えた。

しかし植民地が母国から人口を引き出す有用な機能を果しているという思想は、市民革命以前の植民地に関する文献に頻繁に現われるのである。同時代に見られる重商主義理論にも一貫して、この人口論は主張された。徹底した重商主義者にとって国の力はその人口を蓄えることであり⁽²¹⁾、多くは富として人口を考えた。従ってその国の人口の節約は、資源の節約と同じように重要なことであった。ペアは王政復古以前の時代における人口増加に好意を示す重商主義者の思想を考慮に入れなかった⁽²²⁾。

早くも1549年に、ヘイルズは人口減少に導いたいくつもの政策を非難し、そして人口増加のための特惠が彼の三編の対話劇に繰り返し現われるのである⁽²³⁾。彼は貿易が非常にうまく調整されていたなら、最大多数の人達が仕事に従事することができたであろうと述べた⁽²⁴⁾。この時代以後、重商主義者の人口論に対する姿勢は非常な進歩を示した。それが植民地に関する文献の氾濫した時代に全く変化してしまったとするのは甚だ不合理である。例えば過剰人口への傾向を恐れた⁽²⁵⁾マリーンズでさえ、「多数の群衆がすべてのものより大きい消費を引き起こし、そしてその収入は税によって大きくなり、その結果貿易や商業に活気を与えたのである⁽²⁵⁾。」と云っている。人口増加の傾向に社会的不安や社会的犯罪の増加の可能性を予見し⁽²⁶⁾、また多分植民地化の最も熱心な主唱者であったハックリュートは重商主義の立場に立った。そして彼はイギリスが人口過剰であったということを否定し、「君主の名誉と力は多数の国

民の間に存在する⁽²⁷⁾」と考えた。彼の見解では、植民地が母国に供給する効用は人口の流出ではなく、すべての国民への雇用であった。そして彼は植民地が彼の期待に応えてくれることを確信していたのである⁽²⁸⁾。

- (1) Cf. Beer, *op. cit.*,
- (2) Cf. *ibid.*, p.32.
- (3) *Ibid.*, pp.34-35.
- (4) *Ibid.*, pp.44-45.
- (5) バージニア会社の場合は次の如くであった。

The incorporators of this charter were 56 city companies of London and 659 persons; of whom 21 were peers, 96 knights, 11 doctors, ministers, etc, 53 captains, 28 esquires, 58 gentleman, 110 merchants, and 282 citizens and others not classified. Brown, *op. cit.*, p.228, foot note, 1.

- (6) Bacon, *op. cit.*, p.105. 神吉訳, 162頁。
- (7) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., p.9.
- (8), (9) Malynes, *op. cit.*, p.164.
- (10), (12) Gray, *A Good Speed to Virginia*, p.12.
- (11) Brown, *op. cit.*, p.340.
- (13) Beer, *op. cit.*, p.45.
- (14) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. I., p.19.
- (15) *Ibid.*, Vol. II., p.4.
- (16) *New Life of Virginia*, pp.218-219.
- (17), (18) *Ibid.*, p.219.
- (19), (20) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., pp.4-5.
- (21) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.44.
- (22) フォトレイ, *ダヴィナント, チャイルド, ペティ*。
- (23) ヘイルズ著, 前掲書, 出口勇蔵監修訳, 14-15頁, 100-101頁, 136-137頁。
- (24) 同上, 136-137頁。
- (25) Malynes, *op. cit.*, p.165.
- (26) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.37.
- (27) *Ibid.*, p.43.
- (28) Cf. *ibid.*, p.44.

VI

イギリス国内の人口問題と植民地とを直接関係づけることは、その植民地活動において多くの議論を生む結果となった。

まず、ベーコンは「植民地に送る民としては、園芸家、農夫、労働者、鍛冶家、大工、指物師、漁夫、狩猟家、及び小数の薬剤師、医師、料理人、パン製造人をえらぶべきである⁽¹⁾。」と述べて、頼りになる熟練工やよく訓練された農夫達が植民地に送られなかったなら、その植民地の成功はありえなかったであろうと主張するのである⁽²⁾。またホワイトも「母国や植民地の行政統治者が共通して持っている関心は、新しく形成された国家の枠組を組織するために能力を持った適当な人口を植民地に誘致することである⁽³⁾」と述べた。さらにグレイもまた「国家において熟練工や貿易商人なしでは、繁盛することができないし、国家を維持することもできないのであるから、彼ら(熟練工や貿易商人)は、大事に育てられねばならない⁽⁴⁾」と云っている。そこで、マリーNZは彼らのそれぞれに貿易の独占権を、ある時期与えて、植民活動の魅力を増大させる計画を詳細に論じたのである⁽⁵⁾。

これらの見解に反対するものとして、植民地の労働力の供給には、貧乏人や犯罪人を補充するという考えがあった。ギルバートは「今、国家を悩ませているイギリスの非常に貧しい人々や無法な犯罪を犯すために、本国において圧迫され植民を望んだ人々⁽⁶⁾」の植民活動を大いに奨励した。もし貧乏人や犯罪者が植民地に流出されるなら、彼らは経済的窮乏のための死をまぬがれるだろうし、国家においては、貧者救済の費用を減ずることができる⁽⁷⁾。ハックリュートは、船舶の備品や船材を供給するために、ケチな泥棒を植民地で労働させることを勧めたのである⁽⁸⁾。しかしベーコンはこれらの主張には賛成しなかった。彼は“Essays”のなかで次のように述べている。「人民の屑や悪い犯罪人を、植民地の民とするのは恥づべきことであり、不幸なことである⁽⁹⁾。」と。彼はこのように「人民の屑や悪い犯罪人」が植民地を害するだろうと述べ、彼らの怠惰と無頼と浪費が母国での植民地の評価を落さしめるであろうというの

である⁽¹⁰⁾。ロバートでさえも植民は犯罪者によって成されることはないが、すべての貿易商人や専門職の人達や正直で賢そうな人達が必要とされたと説明している⁽¹¹⁾。これに関するホワイトの見解は最も辛辣で激しいものであった。それはマサチューセッツ湾の植民にその動機づけの思想を与えた大変真面目で誠実な伝導者が、植民地において商業にのみ関心を持っている人達の見解に我慢ができずに次のように書いたのである。「植民地が国家の汚物を流出させるための排せつ口かまたは汚水みぞになるべきだという考えは、一般に著しい誤りであるように思う⁽¹²⁾。」そして彼はこの根本的な誤りが「私達の植民地の最も多くの失敗の理由⁽¹³⁾」であったと考えた。

母国の経済的繁栄のためにいろいろな必要品を供給したり、母国の精練した製品の市場を供給したり、母国の公的な所得の増加や船舶や海運を増大するために、または人口問題の解決——人口の植民地への流出或は国内での雇用促進——のためにか、これらの特別な目的は植民地の勤めであった。これらの主な植民地の機能に対して、あまり目立たないものであり、経済学的というよりはむしろ心理学的と思われる植民地の成果もまた付加されるべきである。その意味において、ハックリュートは新しい環境のなかで移民した人口は再び起き上るだろうと考え、新しい機会を彼らに与えることによって植民地は退廃から救い出されるだろうと信じた⁽¹⁴⁾。またホワイトは植民の仕事が儉約の度合や既に使われていない、または忘れられていた正義と勤勉とを人々に回復させるだろうから、当時明らかであった道徳的退廃を正すだろうと考えた⁽¹⁵⁾。このホワイトの云う儉約ばかりでなく、新しい土地を手に入れるということは創意工夫をも育成したであろう。なぜなら労働者から創意工夫を抑圧している古い国々の非常に富裕なる人々は新しい機械に対して敵意を感じていたからである⁽¹⁶⁾。しかし最も多くの楽天的な考え方には、植民地化が違反や犯罪にみられる経済的原因を除くことによって、それらを善行へ導くことができるという信念を持っていた。ホワイトは「新国家の植民」で次のように書いている。「一般的な善行に正義と愛情が必要とされる。そして大きな国々に関して理解するということは、あらゆる人々が隣人に悪や害をもたらしことなしに十分享

受するために貪欲とか欺瞞、暴力などに対して自然治療をもたらすことである⁽¹⁷⁾。」

偉大な哲学者であるホッブスは、この楽天主義の風潮から離れた独自の見解を主張した。彼は植民地化が人口問題の解決策というよりはむしろその弁解であると主張するために遠い将来のビジョンを突き出したのである。彼にとっての植民地化は地球の開発過程の一段階であったが、最後に「全世界が過剰な住民を持ったばあいは、すべてにとっての最後の救済は戦争であって、それは各人に勝利または死を与えるのである⁽¹⁸⁾。」なるほどホッブスは厭世主義ではあるが、今日から見て彼のこの見通しには一笑にふすことのできない何ものかがあるように思われる。

- (1), (2) Bacon, *op. cit.*, p.104. 神吉訳, 160-161頁。
- (3) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. I., p.19.
- (4) Gray, *op. cit.*, p.33.
- (5) Malynes, *op. cit.*, pp.164-165.
- (6), (7) Hakluyt, *Voyages*, Vol. V., p.116.
- (8) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.37.
- (9), (10) Bacon, *op. cit.*, p.104. 神吉訳, 160頁。
- (11) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. I., p.19.
- (12), (13) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., p.19.
- (14) Hakluyt, *Discourse on Western Planting*, p.160.
- (15) *Peter Force Hist. Tracts*, Vol. II., p.5.
- (16) *Ibid.*, p.6.
- (17) *Ibid.*, p.3.
- (18) Hobbes, *op. cit.*, p.235.